

あぶらむ通信

第7号 1990年7月14日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江 TEL 057772-4219, 3828

飛騨だより

常緑樹の濃い緑と落葉樹の淡い緑が織りなす自然の絵画に、野性の藤がしっとりとしたアクセントをなしています。

昨夜来の強い雨のため外仕事は休み、あぶらむの里に建った作業小屋の自室で、この心安まる風景を窓越しに見ながら、久しぶりにペンを取っている私です。

あぶらむ通信を手になさっている皆様には、お元気でお過しのことと思います。相変わらずのご無沙汰、お赦し下さいませ。

土地取得を終えて一年余、第二段階に入ったあぶらむの里は大きく変化してきました。

その一つは、一昨年暮れに入手した飛騨高山博の建物二棟の完成です。24坪の建物にベランダと厨房を増設し、展示会や講演会、また将来レストランとしても使用できるような多目的ホールを、ナラの林の中に建てました。建物が周囲の自然とほどよくなじみ、仲々おもむきのあるものになりました。また、他の一棟は木工の作業小屋として里の入口に建ちました。

第二は、あぶらむの宿建設がスタートしたことです。“あぶらむの宿には飛騨の古い民家を”と、私たちは秘かに願ってきました。〇〇村に一軒空家があると聞けば訪ね、これまで10数軒の家を見てまわりました。仲々まとまらないお見合い結婚と同じで、多くの人々の仲介の労を無にしてきました。私たちとしても、人生旅路の中で疲れた人々が身を宿すあぶらむの宿は、どこか安らぎのあるものと思い、今日まで探し求め続けてきました。



完成したナラ林の中の多目的ホール

“灯台下暗し”とはよく云ったも

のです。それまで河合村や宮川村など遠方の村々ばかりを探し歩いていたのですが、我が町国府に立派な家があったのです。大工棟梁の片町さんも一目見るなり、「これだネ、これ以外にないネ、この家なら、今手を加えればあと百年や二百年はもつヨ」。彼のその言葉に力を得て、私たちはその家をあぶらむの宿の第一候補としました。

しかし、よいものは誰が見てもよいもので、誰もがほしがるものなのです。そして、持主としては他人の手に渡したくはないものです。幾度となく断られたのですが、周囲の多くの方々のお口添を得て、ついにあぶらむの里へお嫁入りということになりました。私たちの活動をご理解いただき、大切な家をお譲り下さった高山在住の荒川清義氏に心より感謝申し上げます。

フィリピン・キャンプを終えて後、私の毎日はこのお嫁さんの受け入れ準備に費やされてきました。建設予定地の整地と環境整備だけでも一ヶ月余がアツという間に過ぎてしまいました。そして4月30日、つい基礎工事が開始されました。

あぶらむの里の建設の担い手は、現在のところ私と一年間生活を共にしている青年（一昨年は藤本隆君、昨年は馬場慎也君、S君、そして今年は松浦裕太君）、そして地元の協力者の方々です。基礎工事は前回同様、洞邦宏氏の指導、協力を得て行われています。年を追うごとに姿を消して行く飛驒の古い民家。囲炉裏の煙にいぶされ百年余を経たふき色の太い柱や梁には、人を癒す力があります。しかし、あと30~40年もすると、それらの家もすっかり姿を消してしまうことでしょう。私たちには、それらのやすらぎある家を次代に手渡す責任があると思います。

「洞さん、僕らはあと30~40年ほどしか生きられないが、今度の家、できれば二百年ほど残したいのだが」、「それなら、それなりの基礎を打たなければ」。こうして松浦裕太君と私、そして洞さんの三人で、20日余をかけて基礎を完成させました。使用材料は、鉄筋約3トン、生コンクリート44㎡、木造建築の基礎としては異例と思われます。しかし、何ごとも基礎が大切、建物を二百年支えるためには、これだけのものが必要なのだと思います。この四月にあぶらむへやってきた裕太君も、この作業を通して、一つ大きく脱皮したように思えてなりません。共に顔に汗をし、幾多の苦労を経てもものをつくりあげて行くことは、お互いを真に理解し合う上で、とっても大切なことと思います。宿の完成の喜びは、単に建物完成の喜びではなく、そのプロセスに関わった者の、心の触れ合いの喜びでもあると思います。

宿はあぶらむの会の活動基地です。その施設があるだけで多くの働きが期待できます。

例えば、

- ・心の疲れを癒し、心身のリフレッシュを求めてくる人々へのサービスの提供

- ・何らかの理由で学校生活を断念し、将来の道を探し求めている青少年との共同生活
 - ・各種実践教育活動プログラム、セミナー、講演会、研修会等の開催の場
 - ・地方に住む人々と都会に住む人々との交流の場
 - ・心なごむ古き良き建物の次代への継承
- その他多くの働きが考えられます。

あぶらむの宿の大きさは、延床面積436㎡（132坪）、内一階278㎡（84坪）、二階158㎡（48坪）、約30名の宿泊が可能なゆったりとしたつくりです。

建築費は、必要備品を含めて約3,000万円を予定しています。これだけ大きな建物が、この金額で出来上がるかどうかは不安なのですが、その予算枠内に納まることを願うしかありません。

私は、あぶらむの里建設の担い手に、「地元の協力者の方々」と前述しました。ナラの腐葉土の推積した里の敷地は、農業をやるには最高ですが、建設には最悪の土です。敷地内に道路を一本つくるにも、土を入れ替えなければなりません。10tダンプ一台13,000円ほど、10~20台分を入れても微々たるものです。「工事で土が出ればもってきてあげるヨ」と、ダンプ数十台分を無償で提供して下さる石地さん、「大郷さんのユンボじゃ明年までかかってしまうヨ」とブルドーザーで地ならしをして下さる小田さん、莫大な杉材を提供して下さった中屋さん、「大工の日当分だけでいいヨ」と手間賃だけでやって下さる片町さん、「俺でできることは何でも手伝うヨ」と基礎の洞さん、その他多くの方々が直接、間接に私たちを助けて下さっています。あぶらむの里建設はこれまでも、そしてこれからも、このように多くの人々の支えによって実現して行くのです。

地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、食品公害等々、物質的豊かさを追い求めてきた私たちは、私たちの想像をうわまわる大きな歪みをかかえこんでしまいました。その歪みをどのように理解し、克服していくのか、私たち一人々に課せられた緊急課題です。政治や経済など莫大なからみの中で、しかし、基本は私たちの生活の在り様を変えることしかないと思います。

この大きな問題に対して、この飛驒の山奥で私たちに出来るものは、大海を前にした砂浜の一粒の砂ほどのものでしかないでしょう。しかし、共に額に汗をし、畑を耕し、自らの生存に真に必要なものを見きわめて行く作業を通して、私たち一人々が人生の良き旅人として成長し、また、私たちの旅の舞台である地球環境の将来に、ささ



移築する民家



スミ付けをする洞、片町さん



建物を決定するクイ打ち、手前が棟梁の片町さん



基礎の位置決定



完成した200年基礎



宿の完成模型

やかな責任を果たして行きたく願っています。

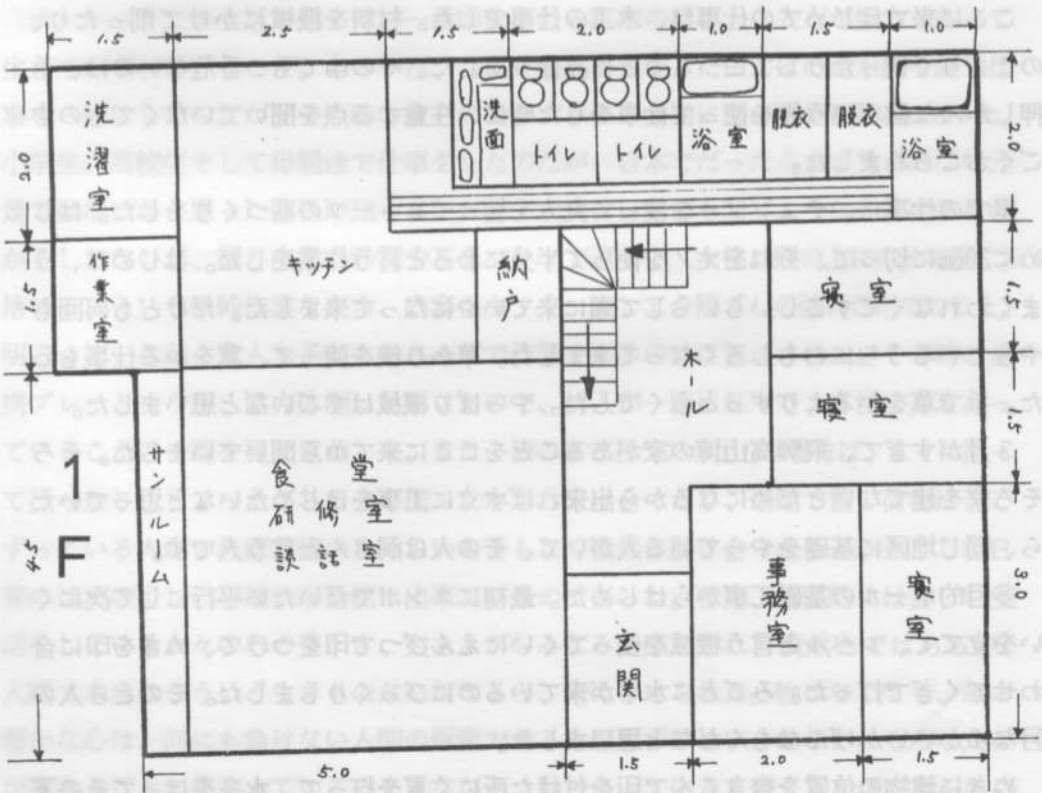
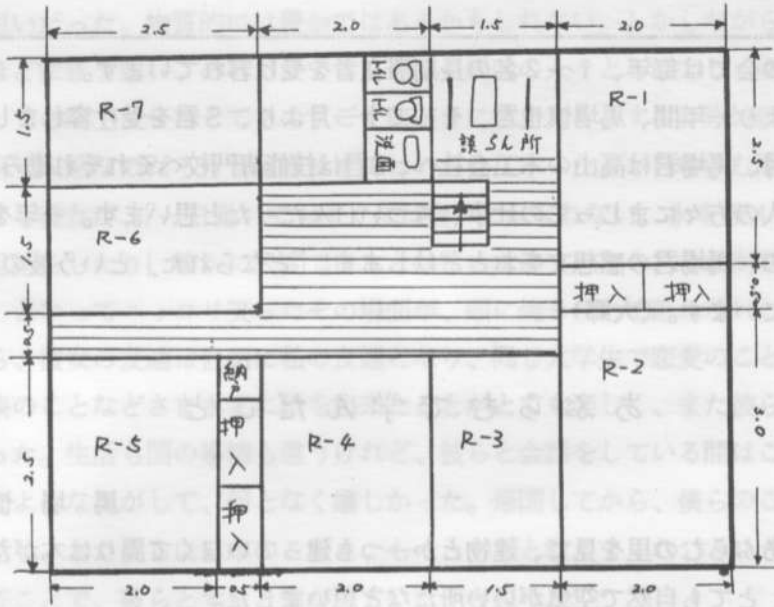
あぶらむの宿建設開始に伴い、また皆様のお力添えをお願いすることになります。どうぞ今一度、私たちに力をお貸し下さいませよう伏してお願い申し上げます。

末筆ながら皆様のご健康をお祈り申し上げます。

1990年6月 あぶらむの会代表 大郷 博

“あぶらむの宿” 設計図

2
F



旅 立 ち

あぶらむの会では毎年、1～2名の長期滞在者を受け容れています。

昨年四月より一年間、馬場慎也君、そして十一月より、S君を受け容れました。そしてこの四月、馬場君は高山の木工会社へ、S君は技能専門校へそれぞれ進みました。

大人や職人の方々にまじっての仕事、きつい日々だったと思います。一年を終えるにあたっての、馬場君の感想文をおとどけます。「どなられた」という彼の言葉に、私は反省しています。(大郷)

あぶらむで学んだこと

馬 場 慎 也

ぼくは、あぶらむの里を見て、建物とか一つも建っていないで周りは木がたくさん立っていて、とても自然で空気がいい所だなと思いました。

ここに来てはじめての仕事は、木工の仕事でした。材料を機械にかけて削ったり、のこぎりで切ったりしてこつこつと作品作りをした。その中でも一番危ないのは、手押しかな盤という物を使って仕事をした時に、注意する点を聞いていなくてもものすごくおこられました。

里での仕事は、チェーンソーを使って丸太を切ってストーブの薪づくりをした。はじめに30cmに切って、それをオノを使って半分にわると言う作業をした。はじめは、うまくわれなくてすこしいらいらして頭に来ていやになって来ました。だけでも何回もやっているうちにおもしろくなって来ました。草刈り機を使って、草をかる仕事もした。手で草をかるよりずっとらくでした。やっぱり機械はすごいなと思いました。

3月がすぎて、飛騨高山博の家があることをここに来てから聞いていました。そろそろ家を建てないとだめになるから出来ればすぐに工事を始めたいなと思っていたら、同じ地区に基礎をやっている人がいて、その人は洞さんと言う人です。

多目的ホールの基礎工事からはじめた。最初にユンボでだいたい平行にして次にくいを立てて、レベルと言う機械を使ってくいにえんぴつで印をつけて、ぬきを印に合わせてくぎで打った。みごとに水平が来ているのにびっくりしました。そのとき人の目なんかいいかげんなもんだなと思いました。

ぬきに建物の位置を書きこんで印を付けた所にくぎを打って、水糸をはってその下



筆者 近影

まってさすが職人さんだなとかんしんした。

木工の作業小屋の基礎工事の時は、仕事の順番がなんとなくわかってきて、鉄筋もうまくしばれるようになりました。そして家を建てることになって、片町さんと言う大工さんといっしょに手伝いをして順番にやってすばらしい家になりました。

里は、みるみるうちに建物とかいろいろな物が順番に出来てよくなってきました。石積みをするだけでも周りの感じがちがって、いきいきしてきていいもんだなと思いました。自分たちでこつこつとやっていくとそれに自然がこたえてくれて、すばらしい物になることが自分で実感できました。

自分自身で一番悪かった点は、仕事の上ですなおに説明とかを聞かなかった事、人にたのまれた仕事の上でわからないのにわかったふりをした事、自分以外の人が仕事の上で注意されている事を聞いていなくてそれと同じまちがいをして、何回も同じ事をくりかえして自分自身の力にならない事をして、とても後悔してしまっただ事です。

次に一番よかった点は、自分の持っていなかった力が、ここに来て思うぞんぶんにだせた事、仕事は前にくらべて、体がきびんに働くようになりました。

周りの人たちと仕事が出来て、いろいろな事を覚えました。社会に出ても人についていけるようにと、先生が教えてくれた事があぶらむの中で一番うれしかった事です。

一年間いろいろとお世話になりました。ひまを見て手伝いに来るかもしれません。

ほんとうに、お世話になりました。

に穴をほって行ってしあげをして、穴にさい石をいれて、ハンマーで上からたたきつけて石をしめつけて鉄筋を組むと言う順番でやった。鉄筋をしぼるときに思うように出来ませんでした。パネルを組む仕事は、洞さんが一人で組んで、セパレーターとかかすがいをちょうどいと言ったらわたすことをした。あつと言うまにパネルを組んでし

1990年フィリピン・キャンプ報告



山岳地帯の村にて マニラスラム街にて
2月23日～3月15日、あぶらむの会として第三回目のフィリピン・キャンプが行われました。今回の参加人数は26名、その中でスタッフとして、地元から専業農家の中屋源兵衛さん、大工の片町勝朗さんが参加して下さったことは、大きな意味があったと思います。

また、プログラム実現のために三年間に渡り、莫大なご支援をいただきました三菱銀行国際財団に、心より感謝申し上げます。フィリピン・キャンプの報告にかえ、キャンパーの感想文をおとどけ致します。(大郷)

フィリピン・キャンプに参加して

笹井 亮子(信州大学教育学科3年次)
このフィリピンキャンプに対して、その意義をあまり理解していないまま参加していたため、途中何度も、村の人々だけでなくキャンパーの仲間に対しても恥ずかしいと思う場面があった。自分の知識のなさや、本当の自分をだせないもどかしさに何度も落ち込んだり考えさせられたり、フィリピンでの生活を体験すると同時に、自分は一体どんな存在であるのだろうか、心の奥でいつも悩まされていた。これからどうしていけば良いのかは、まだ自分の中でまとまっていない。あせらずじっくり考えていきたいと思っている。

そんな私がポントックでホームステイをし、ブリタという大学生に出会えたことは、自分の中でとても大きな位置を占めている。このキャンプでの最大の財産と言っていい程、私には大きな影響を与えてくれた。朝はまだ暗いうちから、陽もとっぶり暮れるまで畑で働く両親の代わりに家事一切をこなし、授業の合間を縫って近所の子ども

達の世話をする彼女を目の当たりにし、自分がとても小さく思えた。日本はお金持ちの国で、そこに住む私には、フィリピンの貧しい生活は大変だろうと言われてたり、台所はどうなっているのか、どんな風に日常生活をしているのかと聞かれるたびに胸の痛くなる思いだった。物質的には豊かではあるかもしれない。しかしながら、今の私には彼女ほど家族を思い、それだけでなく近所や親戚の人々とも協力し、さらに今の生活を少しでも向上させたくてもものすごく前向きに生きようとする姿勢が感じられず、精神的に何て未熟なのだろうと反省せずにはいられなかった。一日中休む間もなく働き、勉強する彼女が、「一日働いてもすぐには豊かにはなれない。水を汲んだり、子ども達の世話をしたり、確かに大変で日本とはだいぶ違う。でも、それが私たちの生活なんだ」といってニコリ笑ったその場面が、頭に焼きついて離れない。

それから、彼女の友達は自然に私の友達となり、同じ大学生で恋愛のこと、仕事のこと、家族のことなどさまざまに話を出来たことがとても楽しく、また彼らの意見が参考になった。生活も国の事情も違うけれど、彼らと会話をしている間はこの国の一員になれたような気がして、何となく嬉しかった。帰国してから、僕らのことを家族や友達に話し、また僕らに日本のことも、もっともっと教えてくれ、という彼らとの約束を守ることで、彼らとずっと繋がっていたいと思う。

ボントックでの生活を通して、一番印象づけられたのは、人と人が協力しあって生きている、というこだ。ある一日、台風で崩れてしまった田んぼの用水路を直す仕事を一緒にしたのだが、その時の彼らの働きぶりには本当に頭の下がる思いであった。小学生、高校生そして母親達で仕事をしたのだが、日本でだったらまず見られない光景ではないかと思った。私が知らないだけで、実は日本でも同じようなことはあるのかもしれないが、掘り出した砂利や石をバケツで運んで（女性は頭の上に乗せて担ぐ）捨てる、という単純作業ながら、内容はキツく、ましてや陽ざしの強い日中でのこと、明るく笑いながら大人も子どももみんなで作業をするのには驚かされた。その時の連携プレーというか、協力体制は見事なもので、村人が一緒になって、本当に支えあっていることの一端を見た気がした。また、隣の家で石ケンが足りなければ、すぐに持って行ったり、ちょっとごちそうを作ったからと分け合ったり、道端で重い荷物に手こずっている人がいれば、何のためらいも苦もなく自然に助け合ったりと、そうした日常のほんの少しの心遣いが自然に出来ているのであった。普段、物質的には貧しい生活をしている人々の心の豊かさ、大きさがしみじみと感じられ、漠然とではあるが、人間て本当はこういう生きものなんだなと、考えさせられた。物はなくても、あの豊かな心は、何にも負けない人間の財産であると思わずにはいられない。そんな人々が事あるごとに集まっているのを見ながら、助け合って生きていくことが、どんなこ



とか、少し味わえたように思う。

村の生活だけでなく、全体を通して、フィリピンに感じたのは、貧富の差が余りに大きいということである。マニラでのスラムと豪邸、ボントックでの農家と教師の家の違いをつきつけられて、何故という念にかられ、今だに納

マニラ市内で子供達に囲まれる著者、中央右 得できないでいる。理論的に説明されても、その生活のあまりの違いを目の前にしたら、頭で説明がつかず、何ともモヤのかかったような気分になる。ただ今言えるのは、それがまぎれもない現実で、私はそれを見たからといってすぐに変えられるわけでもないということだ。フィリピンキャンプを終えるに当たっては、「もしお金があれば、キャベツやお肉を食べさせてあげられるかもしれないが、何もなかったら、ごはんと塩だけでもがまんしてね」と、そんな状況ながら私を姉妹あるいは、娘として受け入れてくれた Kabfilan 一家に感謝の気持ちで一杯である。言葉が通じず、笑顔と身ぶり手ぶりで一緒に過ごしたお母さんが最後に見せた涙は、忘れられない思い出である。最後に、ずっと心に引っかかっていたことを書くと、フィリピンというこの国を、私は日本人としてどう見ていけばいいのだろうかということだ。日本人を捨てて、対等にしなければいけないのか、日本人として見るならどんな立場で理解していけばいいのだろうか。ホームステイを通して、私は家族の一員となれるように努力していたが、その期間を離れて、都市の人々に紛れてしまうと折角努力していたことがどこかに行ってしまうような気がしてならない。本当の意味で、異国を理解することとは、どんなことなのだろうか。人と人とが理解することと変わりがないのだと思うが、まだよくわからないでいる。

フィリピンキャンプに参加して

中屋 源兵衛（スタッフ、専業農家）

私は、飛騨の国府町で専業農家として、ホーレン草の雨よけ栽培を100アールのパイプハウスで四回転で計400アール、それに50アールの水稲作付で、母と妻、長男長女と細々と生活している者です。

そんな私に大郷先生から、フィリピンキャンプに参加しないかと御誘いがあり、昨年、大郷先生の隣に見える野村晃さんがフィリピンキャンプに参加されて、私も写真やらお話等をいろいろ聞いてはいましたが、実際3週間も家を留守にする事に抵抗

がありました。結局、先生に再三誘われましたし私自身も、「百聞は一見にしかず」で実際に自分の目でフィリピンの姿をみたいという欲望で参加する決意をした訳です。

私は、フィリピン旅行に15年前にも1度農協青年部活動をしている頃に、盟友達と行ってはいるが、今回は今回程貧富の差という事を膚で感じなかった。今回は前回と違って旅行の目的が異なっていたから、初めからフィリピンの真の姿を真剣に見てこなければという責任を背負って向かったのです。

キャンプ初日2日目はマニラ泊りで、その間最初に目にしたのは、フィリピンの金持連中の住宅街だった。その住宅街に住んでいる者は、政治家、大資本家達で道路側は、見事な壁で仕切ってあり、外から全然見る事が出来ない。ただ目に止まるのはその家で使っているガードマン（一見兵士とも見える）と庭木、壁には上っている草花だけです。私が想像するに、見えない奥にはプールがあり、住宅も想像も出来ない位の御殿で子供達には何人かの先生が付いて教育を受けているのでは、又邸内には、何十人ものガードマンがいて守っているのではないかと、そしてそこに住んでいる経済界の連中は、政情の不安定な国では常に政治に敏感で、何百年も続いている豪族は、時の政府に上手に乗っていくものでなければ金持の地位は絶対に守り通す事は出来ないだろうと思う。

高級住宅街を見学してすぐスラム街をバスで見学し、ゴミの中から金になる鉄くず、紙、ビニールをあさっている子供たちの姿を目にした時、「なんで」とのことばが出なかった。目に涙が出てきました。同じ人間でなぜこんな生活しなくてはいけないのか、資本主義国家である以上金持貧乏はつきもの、しかし余りにもひどいと思った。しかし私はそこに住んでいる。自分達の土地を持たずに、その日ぐらしの生活者の事をスクラッターとよぶらしいが、スクラッターと呼ばれる人達の表情は実に明るい。心は素直で、私達旅行者に物をせがんだりはしない。ただひっきりなしにゴミを山にして積んでくるダンプによじ登り我先にと、鉄くず、紙、ビニール等を捜し求めている子供達のあの姿を、1日も早くなくす事が世界人類共同の責任であると思う。

日本にもやはり貧富の差はないとは言えない。しかしフィリピンはひどい。私はいつも子供達に話します。「日本程貧富の差がない国があるだろうか」と、たとえばテレビ1台にしても、何十万もするテレビもあれば3・9・8といつて安いテレビもあります。しかし情報をつかむ量は一緒なのです。日本では仕事も豊富にあると同時に、食物、生活資材も豊富にあります。フィリピンはどうか、仕事もない、物もないのない不況です。しかし自然だけは豊富にあります。しかしこの大事な自然でさえも日本企業の進出でいつ破壊されるのかと懸念を持たずにはいられない。

私は思います。物の豊かさの追求はほどほどにして人間の心の豊かさを追求してい

かなければと。物の追求は心の後退に必ずつながります。フィリピンキャンプで私が感じたもの、それは、日本は物質文明では世界の最高峰に位置していると思うが、今後は、心の豊かさで世界の最高峰を目指していかなければと。

次にフィリピン農業について書きたい。私はマニラからバギオまでバスで7時間程とバギオから目的地サガダまで7時間程の間、車窓よりフィリピンの自然にふれることが出来、一生の思い出として脳裏からはなれないだろうと思う。

マニラ、バギオ間の農業地帯は平地で米作りには最も適した所だろうと思うが、あの広々とした土地は数少ない土地で、そこで働く人達は、1日30~40ペソ(180~240円)位もらって生活をしているのだ。そういう人は、農業者とはいわないと思うが(農業労働者)あるいは、昔の日本式で、地主から高い年貢を払わされての小作人で、フィリピン農業は成り立っているのだと思うが、



子供達と遊ぶ筆者

やはり農村地帯へ行っても貧富の差はひどい。今アキノ大統領がやろうとしている農業改良法、すなわち農地開放が成立する事を、力にはなれないが外から祈っています。農地開放する事によってどれだけの家族、人間がいまより裕福になれるかはっきりしている。日本の今日があるのも農地開放あってのことと思う。自分の農地を持つという事は仕事に欲も出ます。土地に対する愛着も沸きます。考えも出てきます。人間に欲を持たせる事は非常に大事な事です。どこの世界に住んでいても農業で生計を立てるという事は非常にむづかしいと常に思っているが。

私はバギオ近辺のあの急な山膚での段々畑の姿とサガダの農地の姿を比較する事が出来ました。バギオは都市だけあってあの段々畑でも、キャベツ、ササゲ、ナス、キュウリ、トマト、ジャガ芋、サツマ芋、トウモロコシ、スイカと、さすが私が本業としているホーレン草はなかったが(気温が高すぎてホーレン草は育たない)日本にある野菜と、顔ぶれは少しも変わらない野菜が栽培されている。さらにおどろいた事は、水のある所から水道管位の太さの管で畑へ水を引っぱりスプリンクラーらしきもので散水していたことで、さすがと思いました。又、バギオの商店街で店頭には尿素だけを見る事が出来ました。農業を売っている店も一軒だけ見る事が出来ました。ですからフィリピンでも金持農家は肥料も農薬も使い益々所得の差は出てきます。バギオはそれだけ恵まれているのです。なぜなら、バギオという大消費地がありマニラという大都市へも輸送が可能という利点を持っています。一方サガダでは米が主流で、自家用

野菜畑が所々見えるだけでした。換金する方法がないのです。地理的にはサガダは非常に悪条件で道路事情が全然違います。バギオ～マニラ間は道路は広く全舗装で交通の便は最高です。距離は遠くても時間的にもものすごく得をしています。その点バギオ～サガダ間は、急な斜面を切り開いた所で常に土砂、石が落ちてきていつ交通がストップするか分からない様な道路事情で、計り知れない差があります。サガダでは野菜を作っても売る手段に事欠くのだと思います。

サガダを拠点にギナン、ビザオ、バガン、ボンドックとそれぞれホームステイに入りましたが、今だ電気の入っていない部落がありました。電気がなければランプ、タイマツの生活です。私の行ったバガンでは水道もありましたが、管を地上に引っ張って来ているのです。地下50センチメートル程埋めてくれば冷たいおいしい水がのめるのではと思ったのですが、何しろ言葉が話せず、自分をあれ程情けなく思った事ははじめてです。バガンの教会で初日昼食をお世話になったベヌー、アテンディ神父の要望で日曜日の礼拝の後、日本の農業を1時間程私が話し、キャンプをしている女子大生の英訳を神父が現地語に訳してバガンの農民に聞いてもらいましたが、言葉の話せない事のつまらなさを十分知りはずかしく思いました。

私はフィリピンへ行く前に友人からいただいた10本の桜の苗をサガダの孤児院の畑に植えて来ました。あの気候で桜が咲くかどうかわかりませんが、咲けば日比友好の絆となる事を祈願して、又、再度フィリピンに足を運んでもっともっと、日本農業の正確な現状をつかみフィリピン人におつなぎ出来る事を期待し、終わりにしたいと思えます。

後援会事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただきありがとうございます。

大郷先生の“飛驒だより”にもありましたように、いよいよ待望の“あぶらむの宿”建設に着手することになりました。宿完成により、藤本隆君、馬場慎也君、松浦裕太君のような長期滞在者、また休暇を利用して遊びに来られるお客様をこれまで以上に受け入れることが可能となります。事務局としても一日も早い実現に向け一層努力していく所存です。

ところで、宿建設その他施設の整備に、約4000万円の資金を予定しています。しかもその資金は、工事を一挙に完成させなければなりませんので、1990年秋までに調達しなければなりません。そこで、当初の計画通り募金活動およびあぶらむの会の活動によりこの資金を獲得いたしますが、世話人代表の方々と協議した結果、一時『あぶ

らむ債』(一口10万円)を発行し、皆様方のお手持ち資金を向こう5年間(無利子)借用させていただくという方法に頼らざるを得ないという結論に至りました。発行期間は、1990年9月30日まで、5年後の債券購入日同日に償還いたします。送金先は募金と同様ですが、送金が確認され次第、預かり証をご送付致します。何卒、ご協力を賜りたく、心よりお願い申し上げます。

なお、近々第二次募金パンフレットを皆様方にご送付致しますが、それまでの間もこれまで通り募金活動は続けてまいりますので、よろしく申し上げます。

(事務局 西田)

5月12日現在の募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 29,112,380円

振り込み総額 27,962,795円

※送金先 郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会後援会

銀行振込 第一勧業銀行池袋西口支店 190-1434235

あぶらむの会後援会 代表世話人 八代 崇

○5月12日現在の募金申し込み者(順不同・敬称略5月12日以降の方は次号にて)

馬場康弘 丸山知子 吉村庄司 尾針恵子 横田喬 高橋玲二 高橋和子 本部喜美子 浅野純子 政二澄 梶原恵理子
大下園 中村紀代男 下田茂 味岡秀勝 小原孝子 宮崎秀貴 井藤道子 富山聖マリア教会婦人会 高橋清子 高松光
子 垣内厚生 布施勇次郎 国府町森林組合 セントポールライオンズクラブ 阿佐ヶ谷聖ペテロ教会 相沢友之 結東
勲 中屋源兵衛 大洞修 平瀬裕三 吉本賢次 佐々木七恵 松浦修郎 岡田賢三 深田馨子 昼間洋治 寺西裕子 中
川聰 筒井啓子 山下明 川上美砂 聖パウロ教会 伊藤友昭 中村洋 池田寿美子 熊谷一綱 菊澤満喜子 平山勝美
西山千明 藤田寛治 中村ひろ子 一丸直也 細川哲士 二木敦子 伴義裕 林英夫 小林宏治 長尾文雄 石川真安紅
林みづ子 織田光雄 西川貞子・健二 須貝千世子 黒井ミヤ 宇野義方 藤田知行 中村正実 戸田三三冬 斎藤友子
平井正成 沼尾康彦 立教高校図書委員会 糟谷珠子 高橋正子 青柳真智子 阿久津富男 佐藤一宏 吉村久美 深野
毅 星野一朗 小岩文子 前田良彦 萩野一郎 吉川良枝 吉川仁 諸橋保夫 橋本禮子 長間四郎 吉澤永進 田中一
有 梅原弘光 芳野達雄 原川恭一 太田泰彦 横溝直樹 本田リン 木村晃男 西川征二 高坂征男 山王丸豊子 田
中幸治 上田敏明 萱間隆夫 松戸伝道集会所一同 宮崎知子 木島出 城間真喜 鎌田陽子 香取信之 祈りの家教会
倉石昇 佐藤良徳 足立征三郎 木下春子 前迫剛士 武市悦子 高野勇 城下彰 名取麻子 遠藤恵子 鈴木博士 齊
藤孝 高野アサノ 内田タエ 鶴川久 菊地栄三 田嶋真広 外村民彦 山本博幸 伴玲子 平岡眞 宮田昌彦・美子
須藤恵子 金城瑞子 形部賢 W・F・ハナマン 米山覚 藤田和久 村瀬孝雄 堀田利子 河野裕道 立教高校むらさ
きの会 寺本康郎 大山小夜子 松岡和夫 神子沢新八郎 川又勝美 村岡明 新倉俊吾・久乃 中島弘一 渡井久美
鎌木静 福田貴 河野正司 島谷晴朗 宮田陽子 田坂昭範 名古屋学院大学キリスト教センター 戸口純 国見登 具
志堅興永 塚田道生 武井侑代 大野由美子 小泉恵子 阿部潮音 小柳謙 笹川三枝子 石井秀夫 興石勇・千英乃
平岡雪雄 須藤秀夫 山本照子 池田サヨ 比嘉マツ 山里ツル 田島昌子 佐多和子 笹岡淳也 鎌木武弥 安保謙
猿田長春 松坂友美 大嶺佐智子 木曜会 反町真理子 成井恵 門田圭介 遠藤明子 首里聖アンデレ教会 藤本絹代
復活教会 安藤希代絵 桂英隆 池袋聖公会婦人会 三原一男 山田益男 鈴木雄一 山野繁子 木田献一 三原達也
新倉俊一 矢野直美 立花泉 岩間光雄 本田欣哉 池田一徳・美枝子 小川卓 成田則子 小笠原スウ 神戸紀子 山
城タケ 徳田その 神島洋二 知念ハル 宮城タケ 嘉数弘子 大城つる 知念ノブ 竹内寛 赤井充也 豊里正子 山
城キク